

1. パートナー活動報告	1ページ
2. いきものの庭 雑記	4ページ
3. センターからのお知らせ	5ページ
4. 江戸文学と旅「私の細道」	5ページ
6. 編集後記	6ページ

パートナー活動報告 -平成29年度前期-

「霞ヶ浦クリーンUp」自主活動前期報告

平成29年度の活動も前半を過ぎましたが、計画通り順調に進んでいます。今号では、折り返しの節目として、前期活動状況を報告致します。

(前期活動概要)

毎年、夏場は法面の夏草が繁茂し回収活動がしづらく、6月に行われる草刈り後と比較するとバラツキが生じます。ただ、今年は夏場に台風も少なく、長雨が続きレジャーに訪れる方も少なく、ゴミの絶対量が少ないのではないかと思います。人に左右される面が大きいため、根気強く継続した活動が求められます。

(前期活動実績) 平成29年4月9日～9月15日まで

- ・回収総量：23袋
 - *前年同期比：ほぼ同率
- ・回収の内訳：可燃→14.5袋 不燃→8.5袋
- ・参加者延人員：33人
 - *前年同期比：約7割増(昨年：19人)

参加人員の大幅な増加は、パートナー有志のご理解とご協力の証であり、有志一同のモチベーションにも繋がっています。



この活動は霞ヶ浦の水質浄化の一環として、パートナーの自主活動を通し「きれいな霞ヶ浦」をテーマに、センターのご協力を得ながら平成23年から霞ヶ浦湖岸(2.3km)のゴミ拾い(毎月1回)を実施しています。今年に入り、湖岸の道路もサイクリングロードとして整備され、県内外からの愛好者が多数見かけられるようになりました。皆さんに今後も気持ちよく利用して頂ける様、パートナー有志一同、7年目の活動を頑張っています。ゴミの量も、台風などで対岸から押し寄せてくる影響もあって増減はしますが、概ね減少傾向でメンバーの励みになっています。活動を通して感じることは、湖岸でレジャーを楽しんでいる地元の皆さんが、「ご苦労さま、ゴミは持ち帰るよ」と回収袋を持参しゴミを持ち帰ってくれるようになりました。地道な活動が少しずつですが、認められてきたのではないかと嬉しく思います。活動の基本は、利用者へ強制するのではなく、あくまでも「ポイ捨てしづらい環境作り」をしながら、啓蒙活動を通してゴミを減少させることです。しかし、まだまだ霞ヶ浦全体としてのゴミの量が多いと考えられます。霞ヶ浦流域に住む私たちひとりひとりの環境への配慮が一層必要であると考えます。

今後の展開として、中長期的な視点から活動の「見える化」を目指し、パートナー有志を含む関係者と協議しながら継続していきたいと思っております。皆さまのご協力をお願い致します。

(パートナー 尾形)

「霞ヶ浦湖岸植物同好会」 観察活動の報告

今期の課題: 今夏は霞ヶ浦湖岸で既存植生に驚異のオオバナミズキンバイなど特定外来生物の繁茂が話題になった。

月/日	調査区	植物調査概況 (EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧種、特外:特定外来生物)
4/13	AB	湖岸は春の草オドリコソウやノジシャ、トウダイグサが開花し、ガマやヨシ、オギも芽生えてきた。
	EFGH	昨年末に整理したE区で大群生したノウルシが一斉に開花した。ヤナギ類も展葉と同時に花を付けていた。
	KL	低地でカサスゲに花穂が付き、ミズオトギリ(県 NT)も発芽した。水路畔でアサマスケ(県 EN)の穂が出た。
5/11	AB	A区低地ではヘラオオバコやキシヨブが花を咲かせ、弁天宮前堀ではタヌキモの生育域が殖えていた。
	EFGH	ヨシが伸びオオヨシキリが囀るH区低地でヤナギトラノオ(県 VU)が開花した。法面ではノイバラが花盛りだ。
	KL	湖岸ではジャヤナギの緑が濃くなり、雄花序を下げたオニグルミの枝先で子房が膨らんでいた。
6/8	AB	弁天宮前堀のタヌキモが花をつけ、隣にササバモ(県 VU)の生育を発見。B区水際でウキヤガラが群生。
	EFGH	H区再生干潟でタケアゼナとアゼナが群生して花をつけ、ミゾハコベやトキンソウ等の新出種も見られた。
	KL	ク리가満開。川尻川沿いでイヌザクラ、ミズキが実を付けた。堤脚水路のカワジシャ(NT)が花と実を付けた。
7/13	AB	A区低地はヨシやオギ、セイタカアワダチソウが超繁茂し、B区水際は満開のミズヒマワリ(特外)で圧巻だ。
	EFGH	H区再生地にササバモ(県 VU)や新出種のアゼガヤとコスズメガヤが出現し、ミズヒマワリも満開だ。
	KL	甘い香りが漂うウネズミモチとタンキリマメに訪花昆虫が来ていた。ヤブマオの花序に密集した小花が。
8/10	AB	A区低地、繁茂したヨシやオギ等の縁でノブドウやヤブマオが絡んでいた。B区ミズヒマワリは依然旺盛だ。
	EFGH	H区再生地のミズアオイが紫の花を付け、E区のシロバナサクラタデが開花し、ビナンカズラも蕾を付けた。
	KL	L区堤脚水路にオオフサモ(特外)が繁茂し通水阻害要因となる。近くでミズアオイやオモダカが開花した。
9/14	AB	A区イベント広場でクサネムが群生。B区低地はツルマメに覆われ、アレチウリの生育域も広がってきた。
	EFGH	低地でヒガンバナやサデクサが開花し、再生地に新出種のコウキヤガラとヒメミズワラビが出現した。
	KL	堤内法面でアズキ(小豆)の原種ヤブツルアズキを発見。東側のワンドでアサザ(国 NT、県 VU)が満開だ。



4月E区ノウルシ(トウダイグサ科)多年草
国、県準絶滅危惧種(NT)。独特の香。



5月H区ヤナギトラノオ(サクラソウ科)
県絶滅危惧Ⅱ類。多年生寒冷地植物。



6月A区タヌキモ(タヌキモ科)食虫植物
根を持たない浮遊性多年草。国:NT。



7月B,H区ミズヒマワリ(キク科)多年草
中南米原産,特定外来生物。繁殖力強。



8月L区オオフサモ(アリハトウグサ科)
ブラジル原産,特定外来生物。多年草。



9月B区アレチウリ(ウリ科)つる性1年草
北米原産,特定外来生物。花期:8-9月

(同好会代表 パートナー有吉)

「魚の定点観察」報告

センター下湖岸の植生再生事業が進み、同地点の状況が一部激変しています。既に集計結果配布済みである平成29年7月8日（土）の採捕状況は右図の通りです。例年夏場のこの時期、スジエビやウキゴリ、ヌマチチブが多く入りますが、加えて最近のツチフキの増加傾向もかなり目立ちます。

直近の9月9日（土）は炎天下、全地点の合計個体数にして1000尾にも及ぶ夥しい量のエビが入り、工事で一旦広い遠浅の状態にあるセンター下湖岸に、一群を成すエビのいる旨確認するに至りました。また同日、霞ヶ浦では珍しい手のひらサイズのハクレン幼魚が（写真上）が、初夏の5月13日には珍しくなったアシシロハゼ（弁天宮）やイサザアミ（再生B地区・川尻）が掛かりました。最近では参加メンバーの皆様がスキルアップしつつあり、今後人員変動があっても柔軟に対応できることでしょうか（写真下）。余談になりますが、7月8日には絶命したテナガエビがいて、折角なのでこれを空焼きにして食しました。やや泥臭いものの、噛んだ際に滲み出るエキスには風味を感じます。甲殻類は表面に目立った色のないものでも加熱で直ちに赤変します。この発色にはβカロテン誘導体アスタキサンチンが関与し、熱でこの物質に結合しているタンパク質部位が変性、結合状態が変化、本来のアスタキサンチンの赤い色調が現れるため、調理時そのことがよく窺えるものです。

（パートナー 新関）

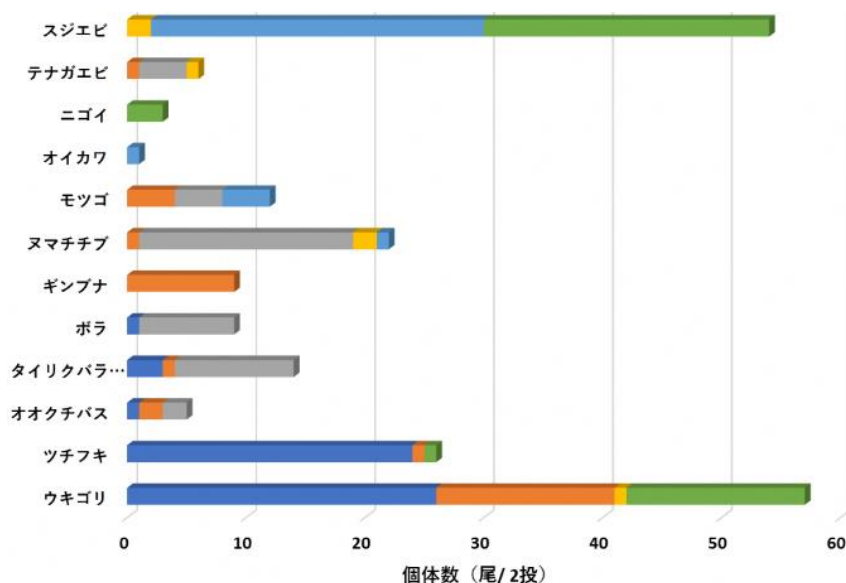


図 採捕魚介類と採捕地点（平成29年7月8日（土）実施）

■ A地区 ■ 弁天宮 ■ 自然再生B ■ 沖宿 ■ センター下 ■ 川尻



いきもののにわ雑記

いきもののにわ雑記 ー誰も知らない植物との出会いー

“見つけ”は偶然で、川尻川沿いの蓮田の所。もう5年も前になります。

9月末、定点観察も終わりのころの3人。

「あの花なんだろう?」「なんていう花?」という声から始まった。畔に黄色く並んで咲く花に目がとまった。スッと立ち上がり「キク科だけれどキクとは違う、何だろうね」で終わった。

後日、今は、湿地や畔でもあまり見られなくなっている「オグルマ」である事が分かった。

主に夏季の花なのに、9月末でも群生して咲いていたのがラッキーでした。

多分、去年も一昨年も、ずっとここにいたに違いない花。なんと偶然に見る事が出来たのだろう。

根出葉でしっかりと冬越しをしているが、畔は定期的に草刈をされるので、残念ながら

次の年も、次の年も、見事に並んで咲いているオグルマを見る事がない。

今までも、蓮田の畔にひっそりと咲いていたのでしようが気付かないでいた。

そして、今年は水路の方に2本、かろうじて残った12個の花。

その田んぼの持ち主にとっては、厄介な雑草で、希少な花とは知らない。

堤防を歩く人たちも、気付くことはないでしょう。

けれど、又いつか、ずらり並んだオグルマを見る事を楽しみに歩いている。

花が終わり種からは発芽しなかったが、1株持ち帰り育てたオグルマは根っこで増えて、

私共の庭と、センターの「いきもののにわ」に綺麗に咲いた。

来年は根出葉からもっと増えて、あの時見た様な、「見事に並んだ花たち」が出現すると

期待しています。はたして、何人の来訪者の目にとまり

「綺麗だね」「なんていう名前の花?」と声をあげてくれるでしょう。

植物同好会の展示には、気付いてほしい「今の様子」が写っています。

誰も知らない、気付かないであろう出会いは、別のことを、教えてくれた。

見ようとしなければ、何も見えないし、聞こうとしなければ、何も聞く事が出来ない。

福田先生が仰って居られました、「足で稼げ」と。さあ、また来月も、足で稼ぎましょう。

(パートナー 江川)



7月21日 いきもののにわ



8月9日 湖岸

センターからのお知らせ

センター夏まつり 2017 結果報告

平成29年度霞ヶ浦水質浄化強調月間（7月17日～9月1日）のメイン行事として、「人と自然 霞ヶ浦を知りつくそう！」をテーマに、県民の皆様が霞ヶ浦をはじめとする湖沼等の水質浄化や環境問題について意識の高揚と実践活動を推進することを目的とした「霞ヶ浦環境科学センター夏まつり2017」を8月26日（土）に開催いたしました。

今年度も、大きなトラブルもなく天候にも恵まれ、県内外から4,200人に御来場いただきました。出展者、パートナー、関係者の皆様の御協力により、61ものブースを設置することができ、大盛況のうちに終了することが出来ました。御協力いただいたパートナーの方々にこの場を借りて感謝申し上げます。



(センター 永吉)

◆江戸文学と旅◆ 紀行文 シリーズ

「私の細道」(その23)

かさじま たけくま まつ
笠島・武隈の松

「おくのほそ道」によると、「その夜、飯塚（飯坂）に泊まる。・・・白石の城を過ぎ、笠島の郡に入れば・・・岩沼に宿る」とある。飯坂から白石を通過し、笠島経由で岩沼に行き、そこで宿を取り、その翌朝、武隈の松を見た、芭蕉は記している。しかし、地図をみると、白石から仙台までの道のりは、白石－岩沼（武隈の松）－笠島－名取－仙台が順当であり、芭蕉の行程は不自然極まりない。一方、曾良の随行日記では、飯坂の後は、白石で泊し、岩沼、笠島と順当な経路で仙台に入っている。

何故芭蕉が、事実と反して、宿泊地を白石から岩沼に換え、わざわざ引き返さなければならぬ笠島を前日に経由としたのか。その訳は、岩沼の「武隈の松」を文面として強調したい思いがあったからだと言われている。期待した武隈の松に耀きを持たせる為には朝一番の訪問でなければならない。この手法は、日光東照宮参拝の時にも、後の松島瑞巖寺詣での折も、事実を度外視して用いる芭蕉独特の縁起に対する拘りである。芭蕉は何故「武隈の松」をそれほど重視したのか。芭蕉の敬愛する能因法師が二度も訪れて歌を詠んでいる事もあるが、この旅立ちに当たって弟子で奥羽出身の挙白が「武隈の松見せ申せ遅桜」という句を贈ってくれたことが、芭蕉にはよほど心に響いていたものと思われる。芭蕉はこの章段の最後に以下の句を認めている。

桜より松は二木を三月越シ

芭蕉

白石を後にした私と妻は、国道4号線を北上して、まず岩沼駅近くの「竹駒神社」に向かった。日本三大稻荷の壮麗な神社であり、圧倒される。赤い大鳥居の横に芭蕉の句碑もある。「武隈の松」はどこかと訪ねたが知らない人も多く、訪ねあぐねてようやく、ここでは無く、一本外れた道沿いと分かった。確かに、松はあった。



車の往来の激しい道沿いで駐車場など無い。近くの空き地に駐車して妻を待たせ、交差点を越えて一人向かった。こじんまりとした社があり、その側に根元で二幹に別れた松が交通の往来を受けながら立っていた。あれほど芭蕉の賞賛した松のその後の姿であった。心なしか句碑も侘びしげである。竹駒神社の壮麗さには及ぶべくもない。芭蕉らが竹駒神社にも行ったことは曾良が記しているが、芭蕉はこの点については一切触れていない。明らかに芭蕉の意図を感じる。

「武隈の松」を後にして、県道39号を北上し、次の目的地、笠島を目指した。丁度、東北新幹線と交差する辺りに、「道祖神社」があり、その先に「籐中将実方の墓」がある。

籐中将実方については、田辺聖子の「おくのほそ道を旅しよう」に詳しく書かれている。藤原実方是一条天皇に仕えた左近衛の中将で和歌の名手であり、平安貴公子の一人であった。藤原行成と喧嘩して、その態度の悪さから天皇に陸奥守に左遷させられた。実方と行成の間にいた女性がかの清少納言であり、奇しくもその関係を示す片鱗が百人一首に残されているから面白い。実方の「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思ひを」の1首は清少納言に贈ったものであり、清少納言の「夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ」は行成に贈った歌である。この辺の話や関係は興味深いが本論から外れるので触れない。実方の奥州での行状としては、「浅香山」の章段で既に述べた「花かつみ」の逸話がある。この笠島では、実方は村人の忠告も聞かず馬で道祖神の前を通り、落馬して哀れにも死んでしまう。その実方の塚がある。

後に西行もこの塚を訪れ、実方の漂泊のあわれを偲んで「朽ちもせぬその名ばかりをとどめ置きて枯野の薄かたみにぞ見る」の歌を残している。芭蕉は、「籐中将実方の塚」のあるこの地を気にしつつも、奥州街道から少し離れてもおり、先を急いだ。実方も西行も、そして、芭蕉自身も同じ漂泊の身として、思いを重ねていたのであろう。が、芭蕉はどうも道を間違えたのかもしれない。塚を見ずに通り過ぎ、「おくのほそ道」には次の句を残している。



笠島はいづこ五月のぬかり道

芭蕉

森本哲郎は写真家の笹川弘三と共にこの地を訪ね行き、「おくのほそ道行」(1984)を書いているが、その中で、この笠島の章段には特に強く心ひかれたと記している。芭蕉が見果てず過ごした地なれば、是非との想いで訪れている。今から約30年前のことであるが、写真を見る限りうっそうとした竹林の山道の奥と云う趣きである。しかし、我々が訪れた時(2016年9月29日)には、墓までの道も整備され、りっぱな案内立て札や碑も置かれていた。

(パートナー 小松)

編集後記

香澄編集会議に加えて頂いて2度目のセンター夏まつりを迎え、秋号の編集に携わることができました。まだ不慣れな私に関われるのは、構成と校正にそれぞれ一時間程度の会議に参加することだけです。記事の執筆と編集、コマ割り等に、見えないところで長い時間と労力が費やされている事を知りながら、自らの非才に悔いるばかりです。会議は、限られた時間の中で毎回、新しい何かを求めて濃密な時間となっています。パートナーとセンターの情報共有のツールである本編に寄稿できるよう努力してまいりますのでご指導の程お願い致します。

(パートナー 栗原)

「香澄」編集委員会 浅野明宏、尾形孝彦、新関紀文、廣原毅、有吉潔、栗原繁、岡村裕美、戸井昌子、大脇香織、川崎安定